

2014 年度後期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 古川 良治

2014 年度後期学生授業評価アンケートの対象科目数は 261 であり、このうち 216 科目において回答が得られた (82.8%)。実施任意科目も含む数値であることを考慮すれば、比較的高い回答率であると考えることができよう。また対象科目の履修者は延べ 8,643 人、延べ回答者数は 5,275 人であり、回答率は 61.0%であった。

アンケートへの回答状況であるが、14 の設問のうち 11 問において 5 点尺度で 4 点以上の評価が得られていた。これは前期の授業評価アンケートとほぼ同様の結果であり、社会イノベーション学部の開設科目について比較的良好な評価を維持できている様子がうかがえる。一方、今回のアンケートにおいて前期から評価平均値が変動した項目がいくつかある。最も上昇幅が大きかったのが設問 14「予習または復習をよくした」(2.85→3.33)であり、学生諸君が積極的に授業に臨む姿勢がうかがえる結果となったことは大いに歓迎したい。また、設問 5「教員の話し方は明瞭であった」(4.06→4.16)、設問 9「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」(3.59→3.91)、設問 13「教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった」(3.99→4.11)のように、教員のパフォーマンスについて評価が上昇した設問もあった。さらに、設問 11「この分野の関心と学力が得られた」(4.01→4.16)、設問 12「総合的にこの授業を評価できる」(4.20→4.27)についても平均が上昇しており、教員・学生双方の授業への取り組みが上手く噛み合ってきたのだとすると非常に喜ばしいことである。しかしながら、設問 1「この授業によく出席した」(4.50→4.47)、設問 4「休講または教員の遅刻が多かった」(4.19→4.07)では平均が下がっており、教員も学生も改めて気を引き締めていく必要があるだろう。

次に、設問 12「総合的にこの授業を評価できる」と他の評価項目との相関係数について検討する。最も相関が高かったのは、設問 9「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」(0.69)であり、設問 8「授業への教員の熱意を感じた」(0.65)、設問 6「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」(0.64)と続いており、学生とのやり取りを通じて学習意欲に応じていくことが大切な要因となっていることがうかがえる。このほかに、相関係数が比較的高かったのは、設問 3「教員は授業時間を有効に利用した」(0.62)、設問 7「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた」(0.62)、設問 11「この分野の関心と学力が得られた」(0.62)、設問 13「教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった」(0.61)であった。これらの結果を真摯に受け止め、授業の改善にむけて継続的な努力を行うことが必要であると考えます。